

■ 世界文化遺産を大阪へ！ 仁徳天皇陵古墳など 49 基の巨大古墳群 ■ 関西大学 × 堺市共催 特別シンポジウムを開催 ～世界文化遺産へのあゆみ 百舌鳥・古市古墳群と関西大学～

【日 時】7月15日（月・祝）13：30～17：00 【場 所】千里山キャンパス 100周年記念会館

関西大学ではこのたび、堺市との地域連携事業として、2019年度世界文化遺産候補「百舌鳥・古市古墳群」の価値を明らかにするシンポジウム「世界文化遺産へのあゆみ 百舌鳥・古市古墳群と関西大学」を、7月15日（月・祝）13：30から千里山キャンパス 100周年記念会館にて開催します。

本件の ポイント

- ・2019年の世界文化遺産候補である「百舌鳥・古市古墳群」を考えるシンポジウム
- ・宮内庁陵墓調査官の徳田誠志氏、堺市世界文化遺産推進室主幹の十河良和氏らが基調講演
- ・有識者による同古墳群の最新の研究成果報告等を通じて、その価値を明らかにする

堺市と羽曳野市、藤井寺市に広がる計 49 基で構成される「百舌鳥・古市古墳群」は、本学とも深い縁があります。本学は 1950 年頃から同古墳群の本格的な学術研究を行っており、故 末永雅雄本学名誉教授によって始まった同研究は、その後関西大学文学部考古学研究室が引き継ぎ、重要な調査を手掛けてきました。また同古墳群のうち、「百舌鳥古墳群」は本学もキャンパスを構える堺市にあるというつながりもあり、堺市とも連携を深めてきました。

本シンポジウムでは、本学と堺市の連携協定を踏まえ、この学術的縁故の記憶を新たにし、「百舌鳥・古市古墳群」の最新の研究成果を報告するとともに、その価値を明らかにします。

正式な登録可否は、6月30日から7月10日にアゼルバイジャンで開催されるユネスコ世界遺産委員会にて決定されますが、登録されれば日本の陵墓として初めて、そして大阪府としても初めての世界文化遺産になります。国内 19 件目の世界文化遺産（自然遺産を含めれば 23 件目）となるか。その動向が注目されます。

つきましては、ご多忙の折恐縮ですが、周知・取材のご検討をよろしくお願い申し上げます。

＜ シンポジウム「世界文化遺産へのあゆみ 百舌鳥・古市古墳群と関西大学」の概要 ＞

【日 時】7月15日（月・祝）13：30 ～ 17：00

【場 所】関西大学千里山キャンパス 100周年記念会館（吹田市山手町 3-3-35）

【プログラム（予定）】（敬称略）

○ 第一部：講演

- ・徳田 誠志（宮内庁書陵部陵墓調査官）：「仁徳天皇陵の保全とその調査」
- ・十河 良和（堺市世界文化遺産推進室主幹）：「百舌鳥・古市古墳群 世界文化遺産へのあゆみ」
- ・海邊 博史（堺市博物館学芸課主査）：「百舌鳥古墳群における巨大古墳の調査成果
～ニサンザイ古墳と御廟山古墳～」

○ 第二部：シンポジウム（司会 関西大学文学部准教授 井上主税）

（登壇者）徳田誠志、十河良和、海邊博史、山田幸弘（藤井寺市教育委員会教育部長）、
田中晋作（山口大学人文学部教授）、米田文孝（関西大学文学部教授・博物館長）

【共 催】関西大学、堺市 【後 援】百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議（予定）

【対 象】どなたでも参加可（無料・事前申込み要）【定 員】700名

【申込方法】往復はがき、または関西大学博物館ウェブサイト（<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>）内の専用フォームより ※詳細は同ウェブサイトをご参照ください

以 上

※なお、当日の取材案内については、開催が近づきましたら別途ご案内申し上げます。

取材に関するお問い合わせ先

関西大学 総合企画室 広報課 担当：寺崎、浦田

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 Tel.06-6368-0201 Fax.06-6368-1266

www.kansai-u.ac.jp

■ 「百舌鳥・古市古墳群」と関西大学の関わり

日本の古墳時代（およそ 3 世紀半から 6 世紀末）には、土を盛って作られた墓、いわゆる古墳が多く造営されました。そのなかでも近畿地方の中心部にある大阪府の「百舌鳥」と「古市」地域には、5 世紀を中心に巨大な前方後円墳が多く築かれました。

この巨大な古墳群は江戸時代終わり頃から陵墓の探索に伴い、当時の学者にも注目され、古墳の大きさやその数から、ヤマト政権の中枢にいた大王(天皇)の墓と考えられてきました。明治維新後には、多くの古墳が天皇や皇族の陵墓や陵墓参考地に治定され宮内省（現在の宮内庁）の管理下となり、他の古墳も民間地であったため、昭和のはじめ頃まで本格的な学術調査は行われていませんでした。なによりも、立ち入りが規制されていた古墳の多くはあまりにも大きすぎて、その全容を知ることができませんでした。

1950（昭和 25）年に関西大学講師、1952（同 27）年に教授となった末永雅雄は、空から古墳を眺めて全体像を知る必要があること、そのためには航空写真による観察・研究が必要なことを発想しました。そこで、戦後民間の航空機利用が解禁されると、百舌鳥・古市古墳群に所在する古墳の航空写真撮影という手法で観察・調査をおこない、正確な測量地図との対比研究をはじめました。その結果、地上からはわかりにくい古墳の選地や相互の関係、さらに巨大古墳には周濠の外側に周庭帯があることを発見しました。すなわち、巨大な前方後円墳には墳丘部分だけでなく、その外側にも様々な施設を伴っていることが判明しました。

このように戦後の考古学研究が盛んになる中、一方で大阪の人口増加を受けて、「百舌鳥」や「古市」地域にも住宅地開発が及ぶようになり、それによって多くの古墳が消滅していくこととなります。そのとき壊される古墳の緊急発掘を引き受け、近畿地方の考古学者が組織した古代学研究会や関西大学、同志社大学、大阪大学などの考古学担当教員や学生が東奔西走して活躍します。関西大学では、末永雅雄名誉教授の指導のもと学生が多くの古墳の調査に参加し、1955（昭和 30）年には、本学文学部考古学研究室により古市古墳群にあった盾塚古墳・鞍塚古墳・珠金塚古墳の発掘調査が実施されました。

古墳が壊される前に学術的な調査が実施され、それまで調査の手の及ばなかった古墳の埋葬施設にも科学的調査のメスが入るようになりました。その結果、内部施設の構造や多くの副葬品を知ることができるようになり、現在、「百舌鳥・古市古墳群」にある古墳の築造年代やその変遷について解明が進んだのも、この時の調査による成果があったからです。

1960 年頃、開発による古墳破壊が続き、そのニュースが盛んに報じられたことから、古墳を守り保存しようとする文化財保護の意識が高まります。さらに、古墳群全体も保存していこうとする市民と研究者の取り組みが始まって、しだいに「百舌鳥・古市古墳群」の価値が周知されていきました。

1970 年以降になると、大阪府や堺市等の地方自治体に「百舌鳥・古市古墳群」の発掘調査や保護を行うために、文化財保護課や博物館、埋蔵文化財調査センターなどの部署が設置されていきました。このような部署において、文化財調査・保護の担当者、あるいは博物館の学芸員として活躍したのが、関西大学文学部考古学研究室で末永雅雄名誉教授、網干善教名誉教授の指導を受けた学生や校友たちでした。さらにそのなかから「百舌鳥・古市古墳群」の研究で成果を挙げている大学の教員や、現在行政機関の第一線で活躍している担当者が多数輩出されています。

今回のユネスコの勧告による「百舌鳥・古市古墳群」の世界文化遺産登録の進捗には、陵墓となっている資産を管理する宮内庁書陵部担当者や、大阪府、堺市、羽曳野市、藤井寺市の世界文化遺産登録と関連する部署に所属する本学考古学研究室出身者が、一つの目的に向けて様々に協力し努力を重ねた結果であるともいえます。さらには学術面だけではなく、この登録に向けた事務部門でも多くの校友が活躍しています。このように、「百舌鳥・古市古墳群」の世界文化遺産登録に向けての取り組みは、まさに関西大学の学縁を土台としており、この大阪に初めての世界文化遺産をもたらす結果が期待されます。

今回のシンポジウムでは、この「百舌鳥・古市古墳群」の世界文化遺産登録の意義、さらにはこの遺産を将来にわたって維持管理していくために、関西大学が果たしていくべきことや、地域と連携を図りながら進めていくべき課題について考えていく第 1 歩となるものです。